



池野 ^{そら} 颯良さん

●下彦間小学校 6年

あこがれの選手

ぼくの将来の夢は、プロのサッカー選手になることです。

ぼくは、1年生のころからクラブチームに入り、サッカーを習っています。それからサッカーの試合をテレビで見たり、新聞で読んだりするようになり、サッカー選手になりたいと思うようになりました。

最近では、外国のサッカーの試合を見て、あこがれの選手もできました。これからもたくさん練習をして、あこがれの選手に少しでも近づきたいです。



佐野ブランドキャラクター
さのまる

市長からの
メッセージ



スポーツの秋です。先月10日まで3週をかけて、市民のスポーツの祭典である市民体育祭が開催されました。10日には陸上競技部門が運動公園で開催され、絶好の秋空のもと、多くの市民が地域代表として参加し、白熱した競技を繰り広げました。大会準備や円滑な大会進行に尽力いただいた体協各支部、競技役員の方々に心から感謝とお礼を申し上げます。

現在、本市は「スポーツ立市」推進の一環として、スポーツツーリズムに取り組んでいます。これまでに県の高校駅伝大会や石井琢朗杯野球大会、東日本生涯軟式野球大会などの関東大会クラスの大会が開催されたほか、クリケットでは国際大会の開催や在日インド、パキスタンの方などによる大会も開催され、多くの外国人の方が本市を訪れ、滞在してくれています。今後もさまざまなスポーツを活用し、新たな人の流れを確立していきたいと思えます。

さて、15ページにもありますが、今月21日には、京都三千院御門主の堀澤祖門さんが本市で講演をしてくださいませ。三千院とは、本市出身の故小堀光栓さんが御門主に就任されてからのお付き合いで、これまで28年間「佐野市民京都バスの旅」を実施し、多くの市民が訪問しています。今回、「全国山城サミット in 佐野」に先駆けた講演を快く引き受けていただきました。どのような話が聞けるのか、私も楽しみにしています。先月から、各地域で敬老会が開催されています。本市では今年度、男性1人・女性23人の方が100歳を迎えられます。100歳以上の方は総勢66人で、最高齢者は107歳の女性です。毎年100歳の方々を慰問していますが、今年も皆さんにお会いできることを楽しみにしています。

実りの秋、収穫の秋です。皆さんもスポーツ、読書、旅行、食べ物など、それぞれの秋を楽しみましょう。

岡部正英



今回の表紙 「市民体育祭(陸上)」平成29年9月10日撮影

10日に行われた市民体育祭・陸上の部。終盤には、男性・女性・小学生が各10人ずつ・総勢30人による玉入れが行われ、チーム一丸となって奮闘していました。

本紙の4・5ページで「スポーツ立市」についての記事を、26ページで「市民体育祭の様子」を掲載しています。ぜひご覧ください。

ながお こうすけ
長尾 耕輔 さん
(宮下町)



キラリ★
話題の「ひと」

○プロフィール

平成5年生まれの23歳。
青年海外協力隊としてタンザニアの中等学校へ派遣され、体育教科の指導・普及のために活動。また、現地での野球の普及にも携わっている。

異国での挑戦

長尾さんは、地元の佐野高校を卒業後、日本体育大学に進学。卒業後の平成28年6月から青年海外協力隊としてタンザニアで活動をしています。青年海外協力隊に参加した理由を伺うと、「人や自然、文化的な魅力がたくさんある場所で、自分を高めながら誰かの役に立てると思えたからです」と話してくださいました。

派遣先であるタンザニアからは体育での協力要請があり、長尾さんは全校生徒が約2千人のセカンダリースクール(中学2年生と高校2年生の生徒が通う中等学校)に赴任しました。そこで、現地の体育は選択科目であることや、進級のための国家試験があるため授業は座学が中心であるなど、日本との違いを目の当たりにしたそうです。

そういった現地の状況から、長尾さんは具体的な体育教科の普及活動として、①授業の質を高める、②運動の機会を与えるの2点を考え、取り組んでいます。特に②については、小学3年生から高校生まで続けていた野球を活かしてクラブ活動をつくり、生徒たちを指導しています。タンザニアに野球が初めて伝えられたのは5年前であるため、生徒たちにとっては「未知のス

ポーツ」という印象が強く、その指導は挑戦でもあるそうです。

文化や生活習慣の違いから、今でも苦労は絶えません。それでも、「生徒や現地の先生の変化や成長、指導の成果を感じた時は、それまでの嫌なことがすべて吹き飛ばすほど嬉しいです」と長尾さんは話します。

体育の価値や必要性、運動を通して心も体も成長できることを現地の方が理解し、それを伝え続けていくという最終的な目標を実現させるためのきつかけ作りをしたいと、長尾さんは日々努力をしています。

帰国は来年6月末。残り9ヶ月の滞在で、彼のまいた種が根を張り、芽を出すことを心から願っています。

(市民記者 渡辺まさ代)



長尾さんは現地での野球指導について、待ジャパン公式ホームページ「世界の野球タンザニア」でコラムを連載しています。



カギツツルシなど、いろいろにまつわる方言のいろいろ

かつて日本家屋の多くは、居間の床板を切り抜いていろいろを作り、そこで暖をとり煮炊きをしました。いろいろは、日常生活に欠かせない大事な存在でした。いろいろが訛(なま)って、イリリ(エリリ)などともいいました。

いろいろやかまどの上につるし、鍋(なべ)や釜(かま)や鉄(てつ)びんなどを、自由に上げ下げできるように装置した鉤(かぎ)がありました。この鉤を共通語で自在鉤(じざいかぎ)といいますが、方言ではこれをカギツツルシといいました。

一方、カギツツルシの多くは、鯛(なま)の形をした木製品だったことから、別にフナともいいました。

いろいろばたのことを、語調を強めてイロリツパタといいました。冬場になると、家族みんながイロリツパタに寄り集まって暖をとりながら、最近の話題やよもやまの話をしながら時を過ごしました。

「鍋(なべ)をカギツツルシに引っ掛けてコシヤエタ(作った)料理を、家族みんなでつつつきながら食べるのも、エーモンでヤンス(ございます)よ」

イロリツパタには、主の座るダンナザシキ(ムコーザシキ・ウワザシキとも)とその左横に妻の座るカミサンザシキがありました。その真向かいが下座で、そこには普通、嫁が座りました。下座のそばには、たきぎを入れる木箱があつたので、下座(きじり)を木尻(きじり)ともいいました。昭和の半ばを過ぎると、電気こたつが普及し、いろいろにまつわる方言は、ほとんど消えてしまいました。

(市民記者 森下喜一)

